



問題行動は問題提起行動

専門部 門 眞一郎 氏
(フリーランス児童精神科医)



「問題行動」というと「本人に問題がある」かのように思い、私たちは本人を何とかしようと考えがちです。しかし、むしろ「その支援に問題あり！」という本人から私たちへの「問題提起」(表出コミュニケーション)と捉えることにより、周囲が理解し、適切に支援すれば問題行動は減少します。



2020年12月12日(土)、当協会専門部の門眞一郎先生を講師として『融 Zoom 碍なオンライン講座「問題行動は問題提起行動」』を開催しました。

当協会ですべて初めてのオンライン講座に、北は北海道から南は沖縄まで420名を超える参加申し込みがありました。このことは、いわゆる「問題行動」への適切な対応、その知識へのニーズの高さの表れだと言えます。

今回、門先生に講座の内容をまとめていただきましたので、今号の特集として掲載いたします。

なお、正会員はホームページから講座を視聴できます。

問題提起行動とは

問題行動という、本人に問題があって本人の行動が問題だから、それを何とかしなければいけない、という受け取り方をされがちですが、それはけしからんと言う方もいます。そこで、問題を我々に問いかけている行動という意味で、「問題提起行動」と呼ぶことにしました。

問題提起行動は、行動自体がどういう形態か、人を殴るとか物を壊すとかそういう形態が重要なのではなく、そういう行動で何を伝えようとしているのかが重要なのです。本人の目の前に問題が横たわっている、すなわち別の言い方をすると、社会的障壁が立ちはだかっている、という意思表示ととらえるべきです。その社会的障壁を取り除いてほしいのだ、という要請と受け取るべきです。だから問題行動とは言わず、問題提起行動と呼ぶことにしました。

問題は社会的障壁にある

障害者基本法が2011年に改正されました。これは国連の障害者権利条約を批准するにあたり(2014)、国内の法律を障害者権利条約に合うように、矛盾したところは改正し、法律が足りなければ新たに法律を作る(例えば、障害者差別解消法)という作業の一つです。

障害者基本法が2011年に改正されたのは、この障害者権利条約での障害者の考え方を踏まえてのことでした。第2条に、社会的障壁という言葉が登場しました。「障害があるものにとって日常生活または社会生活を営む上で障壁となるような、社会における事物、制度、慣行、観

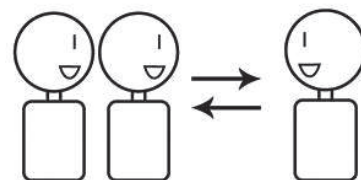
念、その他一切のもの」とありますが、これは非常に強烈な条文です。「慣行、観念、その他一切のもの」というのですから。本人にとって妨げとなるようなものは全てということです。

今日少しお話ししますが、絵カード交換式コミュニケーション・システム (PECS®) を使うことについて、ある教師はそれを否定したと聞いたことがあります。「そんな絵カードを使わず、言葉でコミュニケーションをとるようにしなければダメだ」という慣行、観念ということです。その子にとっては明らかに障壁なんですね。その社会的障壁を取り除くということに関して、第4条で合理的配慮として、要請があれば行わなければならないことになったのです。

障害者差別解消法は、障害者権利条約を批准するために作られたのですが、障害者から社会的障壁の除去を必要としている旨の意思表示があった場合（これは必ずしも本人からの表明でないといけないということではなく、家族や支援者からの表明でもいいわけですが）、そうしなければいけない、必要かつ合理的配慮をしなければいけないということになりました。まだまだそれが正しく理解され実施されてはいないという状況も多いのですが、世の中はすでにそういうふうになっているのです。

コミュニケーションに関する問題提起

コミュニケーション問題は、問題提起行動の根本的な要因になっていることが多いです。もちろん言葉をお話だけがコミュニケーションではありません。自閉症の人には、他者から伝えられることの理解が難しいこともあるし、逆に他者に要求や要望を伝えるコミュニケーションも難しい、自分の気持ちを適切に表現することも難しいということがあります。



コミュニケーションの理解面と表出面の両方が、自閉症の人には難しいのです。

強度行動障害という言葉があります。その判定をされる人の8割以上が、自閉スペクトラム障害と重度あるいは最重度の知的障害と言われていますが、実際にはもっと多いと思います。

問題提起行動をとる人は、不適切な行動の方が、他のコミュニケーション手段よりも効果が大きい、という状態がずっと続いている人です。「コミュニケーションについての周囲あるいは社会の支援が悪い」ということを、問題として提起していると取るべきだと思います。

先ほど触れた障害者権利条約の第2条では、いろんな用語が定義されていますが、そこで「コミュニケーション」も定義されていて、「コミュニケーションとは、言語、文字の表示、点字、触覚を使ったコミュニケーション、拡大文字、利用しやすいマルチメディアならびに筆記、音声、平易な言葉、朗読、その他の拡大・代替コミュニケーションの形態、手段および様式を言う」とあり、要は言葉だけがコミュニケーション手段ではないということです。とくに言葉以外のコミュニケーション手段を、拡大・代替コミュニケーションといいますが、それにもいろんな形態があり、とにかくコミュニケーションの手段や形態はいろいろあります。

コミュニケーション手段の選択権

そして同じく障害者権利条約第21条には「締約国は、障害者が、第2条に定めるあらゆる形態のコミュニケーションであって」、次がすごく大事です。「自ら選択するものにより、表現および意見の自由（他の者との平等を基礎として情報および考えを求め、受け、および伝える自由を含む）についての権利を行使することができることを確保するための全ての適切な措置をとる。この措置には、次のことによるものを含む」とあります。それで、どういう措置があるかということ、(a)～(e)まで項目があって、そのうちの(b)は「障害のある人が、その公的な活動において、手話、点字、拡大・代替コミュニケーションやその他の全ての利用可能なコミュ

ニケーションの手段・形態・様式を、自ら選択して用いることを受け入れ、促進する」つまり、**コミュニケーション手段の選択権は、本人にある**ということです。ですからコミュニケーション手段の選択権は親にあるわけではないし、担任の教師にあるわけでもない。あるいは支援者にあるわけでもないのです。選択権は本人に保障された権利なのです。

コミュニケーションの支援は、あらゆる支援の基礎だと思います。誰かに支援をしようとするときには、その場はコミュニケーションの場になるわけですから。コミュニケーションの支援ができていなければ、他の支援、余暇活動とか学習面とか就労に関する支援とかいろんな支援が実を結ばないということになります。

自閉スペクトラム障害の人のコミュニケーション

自閉スペクトラム障害の人は、通常のコミュニケーションが難しいということが、診断基準の1番目に出てくるわけですから、通常のコミュニケーション手段ではコミュニケーションをとることが難しい自閉スペクトラム障害の人に対して、コミュニケーションの支援をしようとするなら、それなりの工夫がいるわけです。

自閉スペクトラム障害のある人に意思決定支援をしようと思ったら、両方向のコミュニケーション支援が必要ですが、とかく理解の方はいろいろ取り組まれるのですが、表出の方はお留守になることが少なくないのです。表出は難しいから、周りの人が本人の言いたいことを想像する、推測するということで済まして、平気な顔でいる人が結構いるみたいですが、それはとても大きな問題です。

拡大・代替コミュニケーション

自閉スペクトラム障害の人のように、言葉でのコミュニケーションが困難な人には、言葉以外の手段である**拡大・代替コミュニケーション**を活用すべきです。拡大・代替コミュニケーションの手段はいろいろありますが、ほとんどが視覚的なコミュニケーションなのです。視覚的でないのは点字くらいではないかと思えますけれど、あとは筆談にしても絵カードを使うコミュニケーションにしても、あるいは手話にしても、すべて視覚的なコミュニケーションです。

視覚的なコミュニケーションは、自閉スペクトラム障害の人にはとても効果的です。そういうコミュニケーション手段を使う、あるいは使ってほしいという要請があれば、それは合理的配慮の対象としてちゃんと応じないといけない。そこで、**拡大・代替コミュニケーションのひとつ、絵カード交換式コミュニケーション・システム (Picture Exchange Communication System)、PECS[®]**についてお話しします。

絵カード交換式コミュニケーション・システム (PECS[®])

PECS[®]には、コミュニケーションの従来の指導法よりも優れている点がたくさんあります。

ひとつは**準備トレーニングが要らない**ということです。つまり必要なスキルがほとんどないのです。従来のコミュニケーション・トレーニングでは、たとえば絵カードを使う場合でも、絵カードの意味が分からないといけないので、絵カードと実物のマッチングを教えて、それができるようにならないといけないとか、あるいはそもそも相手に注目するというスキルが要るとか、あるいは動作を模倣するスキルが要るとか、そういういくつかの必要なスキルがあるわけですが、PECS[®]ではそういったものは必要なく、唯一必要なのは、欲しいものが目の前に出てきたときに、それに手を伸ばしてとろうとすること、それだけなんです。場合によっては、それすら必要ない場合もあります。そういう事前に獲得しておかなければいけないスキルがほ

とんどないということは、極めて早い時期から PECS®に取り組みができるということです。

最初のステップから、**自発的に要求**することを PECS®では教えます。絵カードを相手に渡して、要求したいものを相手から受け取ることから始めるのですが、最初から自発的表出を教えるのが PECS®です。そして人とのやりとりを始めるためには、コミュニケーションの相手に接近する必要があるわけです。目の前にいつも人がいるわけではないので、自分がコミュニケーションをとろうとする相手のところにまで行って、思いを伝えないといけない。相手の注意を引かないといけないのですが、それを最初から、絵カードを相手の手の中に入れるという形で練習します。そして欲しいモノを絵カードで要求するスキルだけでなく、他にもいろんな追加スキルを教えていきます。

PECS®に対する誤解

当然ながら表出だけがコミュニケーションではなく、**理解のコミュニケーション**も必要なので、「待つ」必要があることを理解するとか、あるいは「ダメ」とか「ない」を理解するとか、スケジュールを理解するとか、そういう理解スキルに関しても、当然 PECS®では取り組むのです。

そして、これまで誤解されてきたことの一つですが、PECS®に限らず、言葉以外のコミュニケーション手段を教えると、ますます言葉の発達を妨げてしまうという誤解があります。しかし、それは全くの誤解です。事実は全く逆だということがわかっています。それどころか、むしろ言葉の発達を促すということが明らかになっています。

それから PECS®を使うことで「**自発性**」が身につくので、プロンプト依存にならなくて済みます。プロンプト依存は、指示待ちとも言われますが、誰かが指示したり、誰かが働きかけたりしてくれないかぎり、自分からは行動がとれないという状態です。自立とは正反対の状態ですね。こういうプロンプト依存は大変不幸なことなのですが、残念ながら12年間の特別支援学校の生活の中で、プロンプト依存にされてしまう人がいます。

PECS®は、科学的根拠のある実践です。いわゆるエビデンスベーストの実践だということは確立しています。

9つの重要なコミュニケーション・スキル

PECS®で教える9つの重要なコミュニケーション・スキルというのがあります。これには**表出スキル**と**理解スキル**の両方があります。**表出スキル**の方は、欲しいものやしたいことを要求するスキルです。それから手助けを要求するスキル、休憩を要求するスキル、そして拒否や拒絶を伝えるスキル、それから肯定、受け入れることを伝えるスキルです。この5つが重要な表出スキルです。

PECS®で教える9つの重要な コミュニケーション・スキル	
表出スキル	理解スキル
1. 欲しいモノやしたいこと(強化子)の要求	6. 要求実現まで「待つ」と「だめ」に応じる
2. 手助けの要求	7. 絵カード指示に応じる
3. 休憩の要求	8. 活動間の移行に応じる
4. 拒否(いいえ)	9. スケジュールに応じる
5. 肯定(はい)	
(PECS®トレーニング・マニュアルp.243-271を一部改変) 11	

理解スキルに関しては、何かを要求したときに、その要求が実現するまで待たなければいけない場合があるので、「待つ」ということを理解する。それとともに、要求したけれど、それはなくなりましたとか、ダメですとか、ありませんとかを理解するスキル。7つ目は、絵カードで指示されることを理解するスキル、8つ目は活動間の移行を絵カードで理解するスキル、最後9つ目がスケジュールの理解です。

この9つが、PECS®では重要なコミュニケーション・スキルと呼ばれています。なぜ重要かという、各スキルを落ち着いて効果的に使えないと、同じ結果を手に入れるために別の手段を使う可能性がとても高くなる、その別の手段が、例えば攻撃的な行動であったり、破壊行動であったり、自傷行為であったりするのです。

ですから、そういった問題提起行動を予防するためには、この9つのコミュニケーション・スキルを早く習得してもらうことが大事ですし、現在問題提起行動が出ている人は、この9つのコミュニケーション・スキルの全てを習得できているとは限らない。たいていの場合ほとんど習得できていないと思います。だから、現在問題提起行動が出ている人にも、この9つの重要なコミュニケーション・スキルを教えることが重要な解決策になります。

ですが、私はそれをちょっと変えて、9つではなく**10の重要なコミュニケーション・スキル**と考えた方がいいのではないかと考えています。

10の重要な コミュニケーション・スキル(門提案)	
<p>表現性(表出)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 強化子を要求する 2. 手助けを要求する 3. 休憩を要求する 4. 受諾(はい)と拒否(いいえ)を伝える 5. 感情・体調を伝える 	<p>受容性(理解)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「待つ」を理解する 2. 「だめ」を理解する 3. 指示を理解する 4. 移動・活動の切り替えを理解する 5. スケジュールを理解する

表現性(表出)の1、2、3番目までは先ほどと一緒に。ただ、4、5番目は「はい」と「いいえ」の表出ですが、「はい」と「いいえ」は同じような指導場面で教えるので、これは1つにまとめて4番目とし、5番目に感情や体調を伝える、感情や体調のコメントをするということを入れたと思います。感情・体調を伝えられないために、自傷行為などに及ぶことも少なくないので、これは大事なことだと思います。

受容性(理解)の方も、1番目の「待つ」ことと理解と「ダメ、ない」の理解は、別々の

教え方をするので、これは分けた方がいいと思います。あとは同じで5つになります。そうすると表出と理解とを合わせて10になるのです。

問題提起行動の機能

問題提起行動についての支援を考えるときには、その行動の「形態」よりもその「機能」を知ることが重要です。その機能が分からないと適切な支援策を考えにくいので、支援策を決める前には、まず**その機能を知る、行動の機能アセスメント**をすることが大事です。アセスメントをするときに必要な知識としては、行動の原理、ABC 三項随伴性とかABC 分析とかがあります。このABC 三項随伴性という行動の原理は全ての行動に当てはまる原理だといわれています。

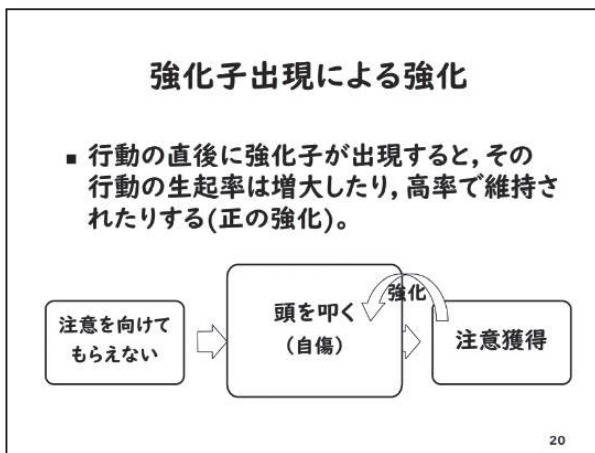
ABC とは何か、まずは**結果事象(C)**です。Consequence という英語の頭文字をとってCとされていますが、この結果事象というのは学習過程では最も重要な要素なのです。学習過程というのは、勉強という意味ではなくて、新しい行動を習得し、これまでの行動が変化することです。

行動(B)はBehavior のBなのですが、その行動(B)が、今後起こりやすくなる、つまり繰り返されていくか、あるいは起こりにくくなるか、ということに大きく影響を及ぼすのが結果事象(C)です。～をしたら～という結果になったという経験ですね。その結果が重要なのです。ある行動をとったら、こういう良い結果になったということから、ますますその行動をとることが増えていく(強化される)、あるいは、ある行動をとったら嫌な結果になった。だからその行動をとらなくなる(弱化される)というように、結果事象は、その行動が今後起こりやすくなるか起こりにくくなるか、ということに大きく影響します。

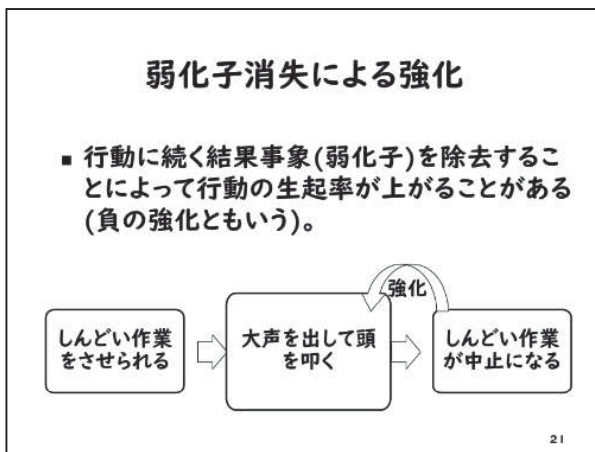
行動の生起率を増大させる場合の結果事象を**強化子**と言いますし、行動の生起率を低下させる場合の結果事象を**弱化子**と言います。

最後にAですが、これは**先行事象、先行条件**と言われます。Antecedentの頭文字のAなんです。行動の直前に先行する事象で、ある行動をとると、そのあと強化子が出てくるとか弱化子が出てくるとかいうことを知らせる合図になるのです。つまり、先行事象が原因で、これこれの行動をとるというのではなく、今こういう状況で、ある行動をとると、その後がいい結果が起きるということを知らせる合図、あるいは今こういう状況で、こういう行動をとると、悪い結果になるということを示す合図ということです。

強化には2通りあります。ある行動の直後に強化子が出現する（環境内に何かプラスされる）と、その行動の生起率が増大したり高率で維持されたりする。これを「**正の強化**」と言います。



例えば注意を向けてもらっていない、誰にもかまってもらえないという先行事象があつて、頭をたたくという自傷行為をした。そうすると近くにいた人がすぐ飛んできて、「やめなさい」と止められて、注意を向けてもらえた。注意を獲得できたということです。その人にとってこの注意獲得が強化子であればその直前の行動は強化されます。だから自傷行為は繰り返されるようになります。同じような状況の時に、この行動をとれば、こういう良い結果が返ってくる、ということを経験したわけです。だから繰り返される。



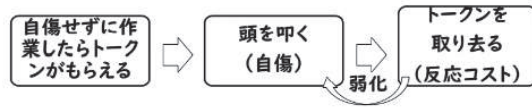
もう1つ強化される場合があつて、それは弱化子が消失する（環境内から何かマイナスされる）ことによる強化です。行動に続く結果事象が弱化子の場合、それを除去することによって行動の生起率が上がることがあります。これを「**負の強化**」と言います。何かを取り除く（マイナス）という意味で、「負」と言います。しんどい作業をさせられているという、これが嫌な状況、嫌なことなのですが、その時に大声を出して頭をたたくなどの自傷行為に及んだら、

すぐにスタッフが飛んできて別室に誘導されて落ち着きなさいという感じで対応されて、とりあえずその作業から解放される。嫌なしんどい作業、弱化子から解放されるということによって強化されるのです。また同じような状況になれば、こういう行動をとって作業から解放される、ということが繰り返されるようになるということです。

弱化に関してはあまり考えない方がいいです。**弱化**は、ある行動の直後に弱化子、嫌なことが出てくると、その行動の生起率は低下する。例えば叱るとか罰を加えるとかです。叱られていない状況で自傷行為に及ぶと叱られた、その叱られることが本人にとって嫌な場合は弱化されます。でも叱られることが注意を向けられることであり、したがって強化子になることがあります。その場合には、問題提起行動は弱化どころか、むしろ強化されます。

強化子消失による弱化

- 行動に続く結果事象(強化子)を除去することで行動の生起率が低下することがある。
 - 《反応コスト》とも言う。
 - 強化的な活動を続ける機会を取り去るのは《タイムアウト》。



23

もう1つ、強化子がなくなることによる弱化というものもあります。

ある行動に続く結果事象が、強化子を取り除かれるのであれば、行動の生起率は低下します。このことを反応コストとかタイムアウトとかいいます。例えば、自傷せずに作業を終えたらトークンを与えるというトークン・システムを採用している場合、自傷行為に及んだらトークンを一部取り去る、トークンという強化子を撤去する。これを反応コストというのですが、そうするとこの行動は弱化されます。叱ったり罰したり、この反応コストを使うことは、できるだけしない方がいいです。

復帰という現象があります。これは特定の行動に対して、今までだったら強化子が出てきていたのに、ある時から強化子が出てこなくなると、行動の生起率は、また元の状態に戻るといことです。叱られていない状況で、頭をたたくと叱られるという場合、叱られることが強化子で、頭をたたく自傷行為は強化されていた。そういう人に関して、ある時から叱らなくなった。そ

うすると元の自傷行為の生起率に復帰してしまうということです。

復帰

- 特定の行動に対して提示していた強化子を提示なくなると、行動生起率は強化子提示以前の高さにもどりやすくなる。
- 強化随伴性がなくなることによる復帰。



24

消去と消去バースト、消去抵抗

大事なことがもう1つあります。**消去**です。大事なのは2種類の強化とこの消去の3つです。弱化に関してはあまり考えない方がいいのです。

消去

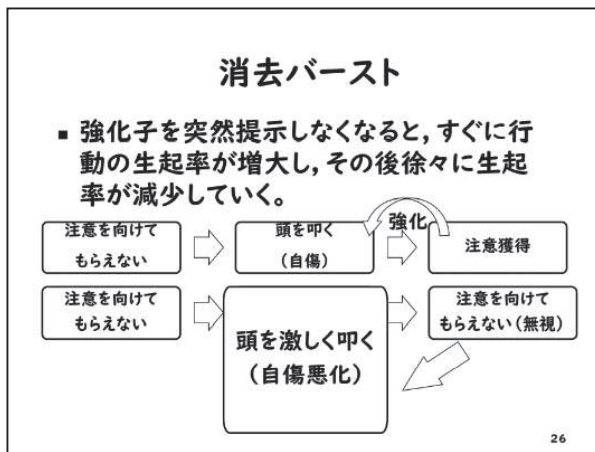
- 特定の行動に対する強化子がもはや与えられないなら、その行動は強化前の低い生起率にもどりがちとなる。
- 強化随伴性がなくなることによる消去。
- 消去バーストと消去抵抗に注意



25

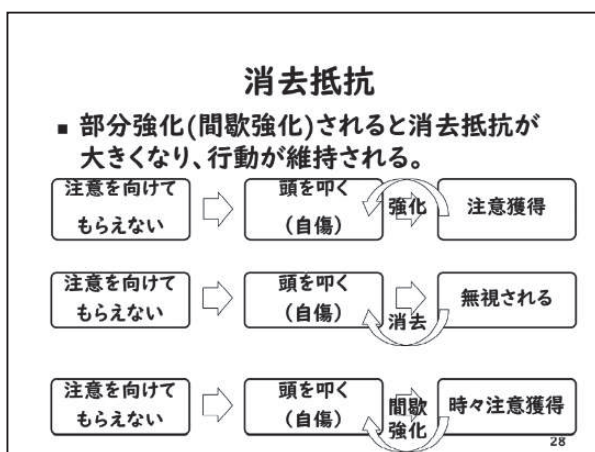
消去というのは、特定の行動を取ると、今までは強化子が出てきたのに、あるときから出てこなくなった。そうすると、その行動は強化前の低い生起率に戻りがちになるということです。たとえば、注意を向けてもらえない状況で、ある人が頭をたたくという自傷に及んだ時に、かまってもらえて注意を獲得することができていた。この人にとっては、注意注目が強化子なので、自傷行為が強化されていたわけです。頭をたたけば注意を向けてもらえるということで、強化されている。そういう状況で、こ

の人の場合は注意をひくために、自傷行為に及んでいるわけだから、注意を向けることをやめる、つまり無視しようということにした場合、今までは注意が獲得できていたのに、獲得できないとなると、その自傷行為はだんだんなくなっていくわけです。それが消去です。ただし、この消去の場合に気を付けないといけないことがあります。それは**消去バースト**と**消去抵抗**です。



します。そうすればとたんに頭をたたくのをやめるかという、そうはならなくて一時的にむしろ激しく頭をたたくようになるのです。自傷は悪化します。こういうことが起きるかもしれないということを知っていないと、無視することでかえってひどくなったから、やはり注意を向けなければならないということになって、また元のパターンに戻ってしまうんです。

こういうことが起きる可能性は十分にあるので、それを覚悟のうえで無視して消去を徹底しましょうということになれば、その後だんだん自傷行為は減っていくのですが、それを知らないとかえって状態が悪化したように見えるのでやめてしまうんですね。



消去バーストというのは、これまでは強化子を出していたのに、ある時から強化子を出さないようにした。そうするとすぐに行動が起きなくなるかという、そうではなくて、一時的にはむしろ行動の生起率は増大して激しくなることがあります。それを過ぎるとまた徐々に生起率が減少していくのですが、例えば注意を向けてもらえない状況で頭をたたく、そうすると注意を獲得できて頭をたたくという行動が強化されていた人に、これからは注意を向けないということスタッフ間で意思統一できたとして

消去抵抗というのは、例えばどこかの事業所に通っている人で、注意を獲得するために自傷行為に及ぶということが機能アセスメントの結果分かって、注意を向けないようにしましょう、無視しましょうということで、スタッフ一同意思統一した。しかし、たまたまあるスタッフが、その日気分が悪くてイライラしていた。そういう時に、この人が頭をたたいたので、つい叱ったり、かまったりしてしまうかもしれません。あるいはスタッフは無視を実行できていたのに、たまたま外から来客があって、そのお

客さんがいるところでこの人は自傷行為に及んだために、このお客さんはびっくりし心配して彼に声をかけてしまうかもしれません。そうすると、強化子を与えてしまうことになるのです。そのように、時々注意獲得ができる、時々強化子が出てくるとなると、この行動はずっと維持されていくのです。ひょっとしたら今度は強化子が出てくるかもしれない、今度は出てくるかもしれないという感じで、自傷行為はなくならない。続くんです。だから消去を考えると、この消去バーストと消去抵抗について、関わる人たちが知ったうえで対策を講じないといけないということです。

大事なものは、この強化子出現による強化と弱化学子消失による強化、そして消去の際の消去バーストと消去抵抗です。

行動の原理

行動が起りやすくなるパターン	行動が起りにくくなるパターン
強化子出現による強化	弱化学子出現による弱化学子
<ul style="list-style-type: none"> お手伝いをして褒められた ふざけたら注目された 	<ul style="list-style-type: none"> ふざけたら叱られた 嫌な課題を早く終わらせたら追加の課題が出た
弱化学子消失による強化	強化子消失による弱化学子
<ul style="list-style-type: none"> 服薬して痛みが消えた パニックを起こしたらやりたくない作業をしなくてすんだ 	<ul style="list-style-type: none"> 約束を守らなかつたらゲームができなくなった 時間をかけて丁寧に作業をしたら遊び時間がなくなった
復帰(弱化学子が出現しなくなる)	消去(強化子が出現しなくなる)
<ul style="list-style-type: none"> 独語したら叱られていたのが、叱られなくなり、独語が元に戻った 	<ul style="list-style-type: none"> 自傷したら獲ってもらえていたが、無視されるようになり、自傷が減った

問題提起行動の解決

問題提起行動の解決に取り組むときに、まずは観察し記録をとって、この**ABC 三項の分析**をする作業が必要です。ある**行動(B)**の前にどういう**先行事象(A)**があったのか、そしてその行動の後にどんな**結果事象(C)**が出て来たのかです。この記録用紙は、強度行動障害支援者養成研修のテキストの第3版についている行動記録用紙です。ABC以外にも、「誰に・何に」という項目と「対応後の本人の様子(その他)」という項目がありますけれども、基本ABC

を考えていくということです。そして、一日のうちどの時間帯によく出るかということも重要な先行事象なので、どの時間帯に何が起きたのかという記録も必要ですが、それを一日中記録するのも大変なので、鳥取大学の井上雅彦先生がスマートフォン用の無料で使えるアプリを作られました。「Observations」、観察という名前ですが、とっさにぱっと記録できるという意味では非常に便利だと思います。時間は切って、例えば1分間隔とか3分間隔とか60分間隔とかで、その枠の中で程度や回数を記録します。すぐにその場で記録できるアプリです。

行動記録用紙

氏名:

日付	先行事象(A)	誰に・何に	何をした(B)	結果事象(C)	対応後の本人の様子(その他)	記録者

(強度行動障害支援者養成研修テキスト第3版, p.314, 中央法規, 2018より)

提起されている問題その1

問題提起行動が提起している問題の第1問です。その行動の「機能」は何かということです。「なぜこういう行動をとっていると思いますか」という問題提起です。

問題提起行動の機能としては、人によっていろんな分け方があって面白いのですが、ミルテナーガーという人の『行動変容入門』という本では、正の社会的強化、負の社会的強化、正の自動強化、負の自動強化と4つに分けてあります。社会的強化は人が介在する強化で、自動強化は人が介在しない自分一人だけの状況でおきる強化です。あるいは先に紹介した鳥取大学の井上先生が書かれているのを見てみましょう。『強度行動障害のある人の「暮らし」を支える』(中央法規, 2020)の中で、井上先生は、まずコミュニケーションの機能のある問題提起行動と、コミュニケーションの機能はない自動強化の機能とに分けておられます。そしてコミュニケーションの機能は3つ、注目要求の機能、回避や逃避の機能、そして物や活動の要求機能に分けておられます。自動強化の機能は、その行動自体が生み出す感覚刺激によって強化されるというものです。合わせて4つに分類されています。

京都府自閉症協会父親ネットワークの学習会でも講演して下さったことのある、畿央大学の久保賢一先生の『行動問題解決ハンドブック』(ヒューマンケアブックス 学研, 2019)で、久保先生は大きく2つを挙げておられます。この本では、あるものを獲得する機能、それからあるものから逃避回避する機能です。獲得については、他者からの注目を得る、物や活動を得る、感覚刺激を得るというように3つに分け、逃避回避についても、他者からの注目から逃れる、物や活動から逃れる、感覚刺激から逃れる、というように3つに分けておられます。

そして、これから紹介するのは、PECS[®]開発者のアンディ・ボンディ博士の分け方です。ボンディ博士が分けている機能はこの3つです。「強化子を獲得する」というのがまず1つです。結果事象として強化子が出てくる。強化子としては具体的な物であったり、活動であったり、注目のような人的なものであったり、感覚刺激のようなものであったりします。2つ目は「嫌悪事象からの逃避や回避」です。結果として弱化学子や嫌悪事象が取り除かれるということです。

他者からの要求や嫌な活動、あるいは嫌な状況や苦痛からの逃避や回避です。1番目は正の強化、2番目は負の強化です。

この2つに関しては先に紹介した人たちも言及しておられるわけですが、ボンディ博士はそれに3つ目を加えています。3つ目は、結果とは関係なくて、先行事象の変化の方が関係してくる。つまり、**結果事象は何も変わらないけれども、先行事象に誘発されて起きる問題提起行動で、それは強化子がなくなってしまうたり、あるいは強化子がなかなか手に入らなかったり、ということでイライラして起きる問題提起行動**です。あるいは強化率が低下したことにイライラする。今までだったら10個の作業をしていたらトークンがもらえたのが、それが10個やっても15個やってももらえないというように、強化率が低下している場合です。あるいは痛みや恐怖や興奮に誘発されて出る問題提起行動です。これらは、結果はまったく変わらないけれども、とにかくイラっとしたりして、ついそういう行動をとってしまうということです。

例を挙げましょう。

1つ目の「強化子を獲得する」という機能です。A君は別の生徒が自分のタブレットを使っているのを見つける。A君がその生徒を殴ると、その生徒はA君にタブレットを渡す。タブレットという強化子を獲得したわけです。

2つ目は「嫌悪事象からの逃避や回避」です。B君はいくつか新しい作業課題を出されて席に着かされる。作業時間中に「トイレに行きたい」と言っただけは何度もトイレに行く。そうすることで、その都度トイレに避難できて作業から逃避できるということです。

3つ目の先行事象に誘発される例です。Cさんは運動場で転んで膝を擦りむいた。そしてCさんは痛くて泣き喚いた。泣き喚いたからといって痛みが消えるわけではないのですが、痛みによって誘発されて泣き喚いた。あるいは、体育が嫌いなCさんが、自分のスケジュールを見て、今日体育があることを知り、大声で叫んだ。それで体育から解放されるわけではないのですが、とにかく体育があることを知った瞬間に、そのことに誘発されて大声を上げたということです。

提起されている問題その2

提起されている問題の第2問です。問題提起行動の機能が分かったら、「**どう支援すべきですか?**」という**問題**です。関わり方を、今までとは変えてほしいということです。



問題提供行動の支援の3本柱

B(行動)に関して

支援の焦点は行動の撲滅ではなくて、**行動を別の行動に置き換える**ということです。望ましくない行動にだけ焦点を合わせて、それを消去しようとするだけでは、うまくいかないことがよくあります。その望ましくない行動を望ましい行動に置き替える、というところに焦点を合わせるのです。そのためには、望ましくない行動である問題提起行動と同じ「機能」を持つ「別の行動」(しかもそれは望ましい行動)を教えるということです。「機能が等しい代替行動」を教え、そして強化する。そして、問題提起行動が出た場合は、強化せずに消去することです。

A(先行事象)に関して

先行事象を変えることを考えます。**先行操作**です。**どういう行動を取るとよいか分かりやすい先行事象に変える**。例えば、機能の等しい代替行動を取るための手がかり(弁別刺激)を理解しやすくする。弁別刺激とは、こういう行動、こういう代替行動をとったら、よいあるいは悪い結果事象になるということの合図となる先行事象です。それがよく分かるように、例えば、**構造化**を使うわけです。状況を分かりやすくするという意味では、構造化は先行操作の1

つでしょう。

それから**あらかじめ機能的なコミュニケーションを指導しておく**ことです。例えば PECS® を教えておくというの、先行操作のうちに入ると思います。

C(結果事象)に関して

結果に関して考えるべきことは、**分化強化**です。強化に差をつけるということです。Bに関しては、機能的に等価な代替行動を、つまり**問題提起行動と同じ機能を果たすけども、もっと社会的に受け入れられるような代替行動**を教えます。それを教えて、それができたときには、しっかり強化するという分化強化です。これは「代替行動の分化強化」(DRA)と呼ばれます。それと共に、「他行動の分化強化」(DRO)を使うこともできます。これは、**問題提起行動が出ていないときに、その時の行動を強化する**ということです。問題提起行動が出ていないときは、何か他の行動をとっているはずで、それを強化する。そういう分化強化が、他行動分化強化です。

それから、もう1つは**消去**です。上記のことをしていても、問題提起行動が出ることもあるかもしれません。それに対しては消去を考えます。問題提起行動が繰り返されているということは、強化子が手に入って強化されているか、弱化子が取り除かれることで強化されているかです。問題提起行動が、何かによって強化を受けているわけです。

ですから強化子が出てきて強化されている場合だったら、その強化子が出ないようにする。あるいは問題提起行動をとると、弱化子がなくなるので強化されているのなら、弱化子はなくなるように、そのままにするということです。問題提起行動が出た場合は消去を考える。ただし消去バーストや消去抵抗に注意しないといけません。

以上の3つ(先行操作、代替行動の分化強化、消去)が支援の3本柱です。

機能的に等価な代替行動

とにかく、先行操作としての構造化も重要ですが、**機能的に等価な代替行動を教える**ことはもっと重要です。

機能的に等価な代替行動を、ボンディ博士による機能の3分類に対応させて考えてみましょう。

機能的に等価な代替行動(コミュニケーション)	
機能	代替行動
欲しいモノ・活動・感覚刺激の獲得	絵カードで要求する 「はい」を伝える
嫌なことからの逃避/回避	「いいえ(拒否)」を伝える 休憩を要求する 手助けを要求する
直前の状況に誘発されて	「待つて」を理解する スケジュールを理解する 未定/変更を理解する 体調をコメントする

まず1つ目、獲得機能ですが、たとえば欲しいものや感覚刺激の獲得機能に関しては、問題提起行動を使って要求するのではなくて、絵カードや文字で要求することを教えます。さらに、これが欲しいですかと問われて、奪い取るのではなく、「はい」をジェスチャーで伝えることを教えます。

次に2つ目、嫌なことからの逃避・回避に関しては、「いいえ」という拒否をジェスチャーで伝えることを教えます。「いません」とか「嫌です」ということを絵カードや文字で伝えるなどを教えます。

それから、しんどい作業の時など、途中で「休憩」を絵カードで要求することを教えます。あるいは、難しい作業だったら、「手助け」を絵カードで要求することを教えます。こういったことが代替行動になります。

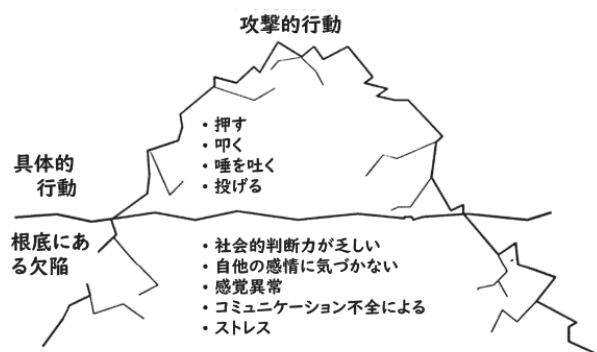
3つ目、直前の状況に誘発されている場合は、ただ待たされたり、いつまで待たされるのか見通しが立たなかったり、イライラしてきて、前の人をたたくなどですが、そういう時には

「待つ」ということの意味を視覚的に教える必要がありますし、スケジュールの理解も教える必要があります。そしてスケジュールを教える中で、予定が「未定」とか「変更」の理解も教えます。欲しいモノが今は無いことの意味も教える必要があります。無いものは見えないですが、空の容器とかお皿とか袋とか、あるいは両手を広げて、「無い」という状態を見せることはできます。もしPECS[®]で要求したものが無い場合は、絵カードにユニバーサルNOシンボルのシールを貼ったり書いたりして伝えます。それから体調を絵カードでコメントすることも教える必要があります。

以上、問題提起行動の機能を明らかにして、同じ機能を持つ代替行動を考えて、それを教える強化するという話でした。

ダイナミック冰山モデル

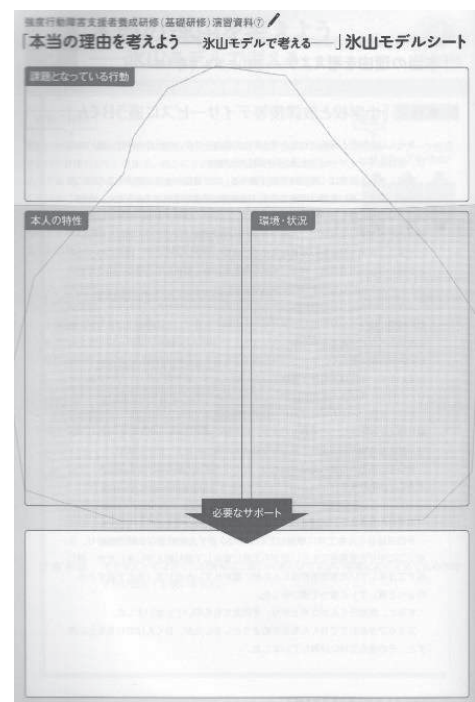
TEACCHの冰山モデル(1989)



ここから、ちょっと話題を変えて、冰山モデルのお話をしたいと思います。そもそも注意深く観察しないと分からないような、物事の重要な局面を説明するための比喩として、「冰山」が使われてきたわけですが、これを自閉症の人の行動を理解するための比喩として用いたのは、ノースカロライナ大 TEACCH[®]部初代ディレクターのエリック・ショプラー教授です。私が調べたかぎりでは、一番古いのが1989年の本です。冰山の上部、目に見える部分が、具体的な行動

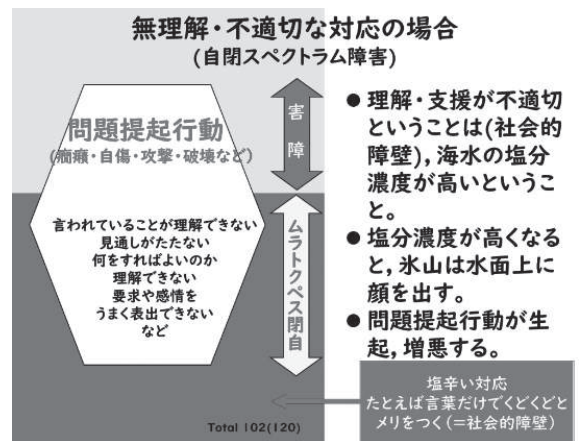
です。例えば攻撃的な行動です。大事なものは冰山の下部なのです。根底にある欠陥が、本人の特性です。けれども、話はあくまで冰山の中で完結しているのです。医学モデルなのです。でも今は障害に関しては、医学モデルよりも社会モデルで考えるのが当たり前になっていますので、冰山を社会モデルで考えてみようと思います。そもそも自閉症関係の冰山モデルにもいろいろあって、TEACCH[®]が一番最初だと思いますけれども、その後も水野敦之さん*が多少改良した冰山モデルを作ったり、あるいはアスピーとグロスマンはABC分析を組み合わせた冰山モデルを作ったり、それから井上先生の冰山モデルもあります。例の強度行動障害支援者養成研修テキストの中に出てきます。

これは井上先生の冰山モデルのシートで、テキストの第2版、第3版に登場したものです。冰山の海面より上が課題となっている行動を書く欄です。そして冰山本体の左側に本人の特性を書いて、右側に環境や状況を書いて、下に必要なサポートを書くというシートですが、環境や状況を書くようになったことで、これは社会モデルで考えられていると思うのですが、冰山の本体の中に、環境や状況を書くというのも、何かおかしい話だと私は思うので、私なりに考えてみました。



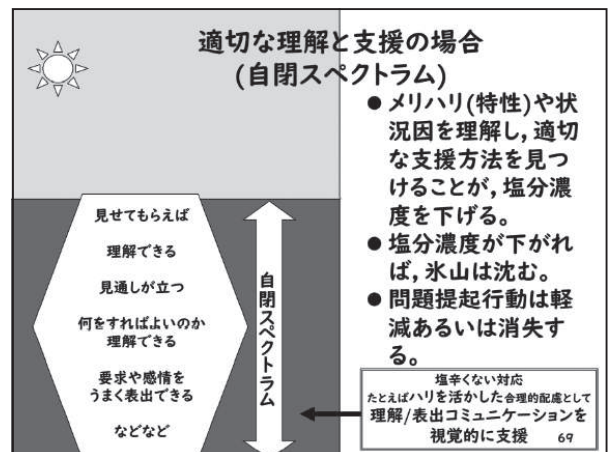
*水野敦之さん — 宮崎県中央発達障害者支援センター センター長

私の冰山モデルは「**ダイナミック冰山モデル**」と呼んでいます。つまり動くんです。社会モデルで考えていますから、当然環境とか社会を問題にします。冰山の環境と言ったら海です。空もありますけど、ここでは海だけを考えることにします。海水の塩分濃度が高いと、浮力が大きくなります。海水の塩分濃度が高いということは、社会から「塩辛い対応」をされるということです。例えば言葉だけでくどくどと、メリを突いてくる。メリというのは弱点ということです。つまり社会的障壁が厳然として存在する。そして冰山はぐんと大きく浮き上がります。海面より上の部分が問題提起行動です。下部の特性のメリの部分が責め立てられるわけです。たとえば、言われるだけでは、意味がよく理解できないとか、見通しが立たないとか、何をすればよいのか分からないとか、要求や感情をうまく表出できないとかです。そうすると、海面下の「自閉スペクトラム」に海面上の「障害」がつきます。要するに海面より上に、冰山が出てくるような状態が、「障害」という状態で、海面上に出ないでいる状態は、「自閉スペクトラム」という特性だけであり、「障害」とは呼べないと思うのです。社会的障壁があるために継続的に日常生活や社会生活に大きな制約を来す状態になったら「障害」ですから（障害者基本法による）、私は「自閉スペクトラム」と「自閉スペクトラム障害」、この2つを区別して使っています。



問題提起行動に関しては、コミュニケーションの問題が非常に深刻です。

塩分濃度がゼロ、塩辛くない対応というのは、ハリ（得意なところ）を生かした合理的配慮として、理解／表出コミュニケーションをしっかりと視覚的に支援してもらっている状況です。社会的障壁が取り除かれている状況です。そうすると冰山は海面の上に出てこないの、「自閉スペクトラム」のままの状態です。見せてもらえば理解できるし、見通しが立つし、何をすれば良いのかが分かるし、要求や感情を絵カードで表出できるというように、ハリがちゃんと生かされているわけです。ですから、環境次第、社会的障壁次第で、冰山は浮き上がったり沈んだり変動する可能性があるわけです。だから「ダイナミック冰山モデル」と呼んでいます。



今は「自閉スペクトラム」状態でも、将来、就職した時に社会的障壁がある職場だと、障害レベルになるかもしれません。今は「自閉スペクトラム障害」でも、周囲の人々の理解や支援が良くなっていくと、障害レベルではなくなって、「自閉スペクトラム」の状態になるというように動的に考えています。

ABCDEF 支援

ABC 分析のお話をしましたけれども、私は更に DEF を付け加えました。Dは**障害特性の「メリ」の部分**です。英語では Deficit で、日本語では「欠陥」と訳している方が多いですけど、私は「メリ」と訳しています。他方、Eは**障害特性の「ハリ」、強み**です。Extra 又は Excess

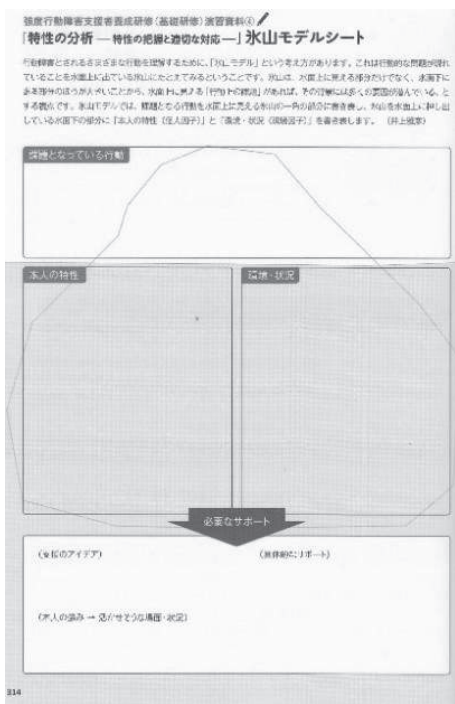
の頭文字です。そしてFは機能 Function です。ということで ABCDEF となります。

そこで、ABCDEF 分析に基づく支援ですが、まずAに関しては「先行操作」です。環境の整理、例えば視覚的な構造化を行うなどです。そして機能的なコミュニケーションの指導です。Bに関しては機能的に等価な代替行動を教えるということです。例えば PECS® を使って表出することを教えます。

Cに関しては、結果事象をどうするかなのですが、これは機能的に等価な代替行動を取ったときに、しっかり強化子を出して強化する。あるいは問題提起行動を取っていないことに関して、強化するという事です。そして問題提起行動がそれでもまだ出ることがあるでしょうが、そういう時には強化子を出さないようにして消去するという事です。そしてその問題提起行動の理由、機能つまりFですが、それを考える時には、特性のメリ(D)を考えることが大事ですし、支援策を考える時には、生かすことのできるハリ(E)を押さえておかないといけません。

例えば、先行事象としては、言葉だけで指示されたり、作業がずっと続いたりして、疲れてきて休憩したいということがあります。そういう先行事象の後に、自傷とか他害とかパニックとかの問題提起行動が出てくる。そこで作業から解放されると、弱化学子消失によって、問題提起行動は強化されます。機能としては回避や逃避です。

次は「ハリ」ですね。視覚的な手段なら要求や気持ちを表出できるとか、視覚的な情報なら理解しやすいというハリを生かして、先行事象に対しては、あらかじめ視覚的なコミュニケーション支援をしっかりと行って、例えば PECS® を教えて表出コミュニケーション支援をし、視覚的構造化をして理解コミュニケーションの支援をしておく。作業していて疲れてきた時に、代替行動としては PECS® で休憩を要求する。そうすると結果として、休憩という強化子が手に入って、代替行動は強化されます。機能としては強化子の獲得です。

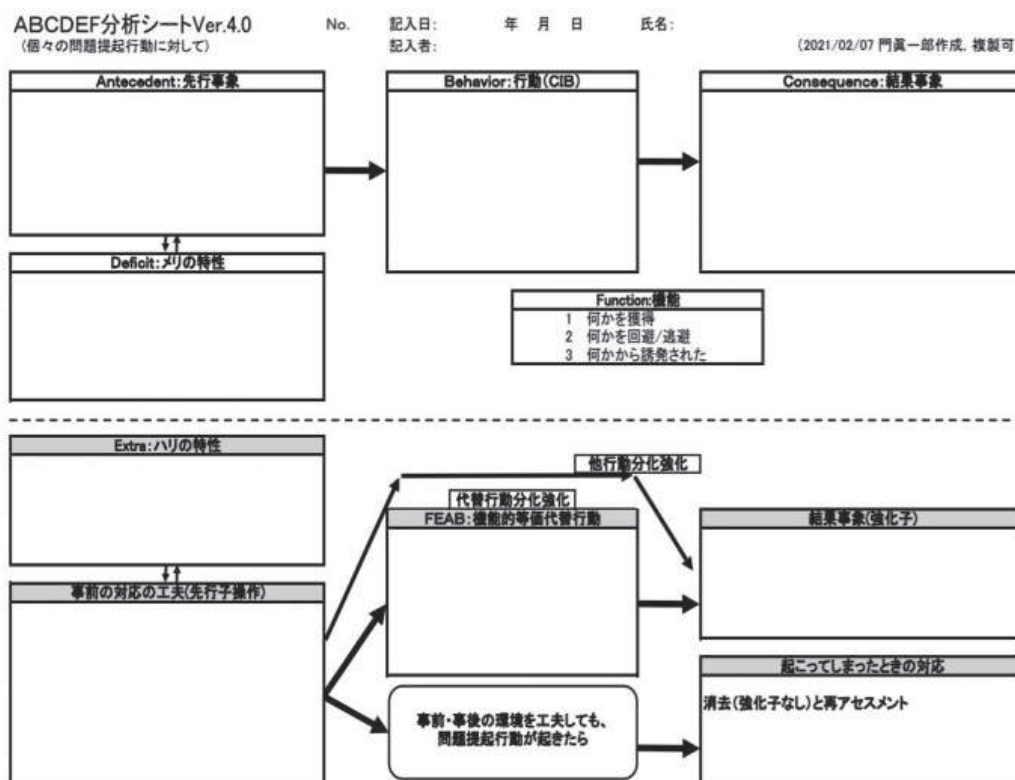


ところで、先程紹介した井上先生の氷山モデルシートですが、実は最新版(『強度行動障害のある人の「暮らし」を支える』中央法規、p.314)を見ると、今までのとはちょっと変わってるんです。「課題となっている行動」と「本人の特性」と「環境状況」を書く所はこれまでと同じだし、「必要なサポート」を下に書くのも同じなのですが、「必要なサポート」の中に括弧書きで(支援のアイデア)、(具体的なサポート)、(本人の強み→生かせそうな場面・状況)という項目名が加筆されているのです。

私は、支援を考えるときには、メリよりもハリの方が、つまり強みの方が大事だと思うので、これを忘れずに書き込む欄が必要だと思っていましたので、井上先生もこういう形で欄をここに作られたことはいいことだと思っています。

しかし、私は、無理に氷山のシルエットを支援シートの中に入れ込まなくてもいいのではないかと思うので、こういうシート(ABCDEF 分析支援シート)を作ってみました。これは、もともと ABC だけに基づくシート、井上先生の「ステラテジー・シート」をベースにしています。ABC はそのままです。

そこで、Aに関しては、やはりD(メリ)を考えておく必要がありますし、問題提起行動の機能としては、①何かを獲得②何かを回避/逃避③何かから誘発されて、という3つを明らかにする必要があります。そして、それに基づいて機能的に等価な代替行動を考えるわけで、その



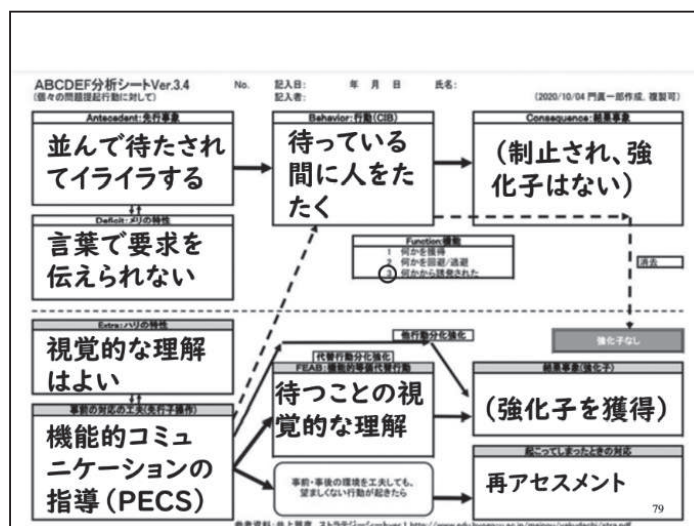
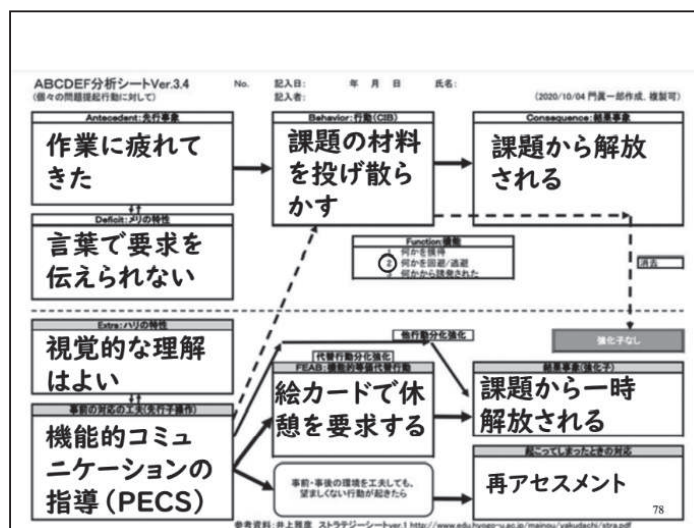
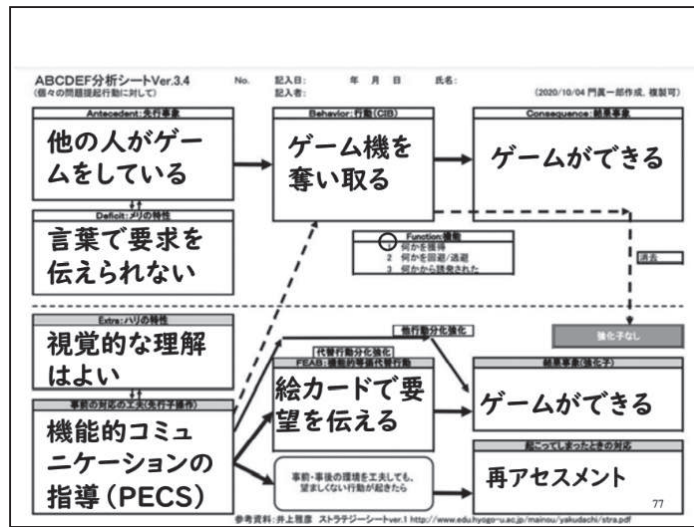
ためにはE(ハリ)が重要なのです。得意な事はやっぱりちゃんと書き出すように、忘れないで書き出すように欄を作っておかないといけない。「特性」という欄だけにすると、メリばかり書いてしまいやすいのです。

そこで、このE(ハリ)に基づいた事前の対応、先行条件をどうするかということを書き込む欄があります。それから代替行動分化強化でなくても他行動分化強化という方法を取る場合もあるので、その場合のルートも書き入れました。問題提起行動を起こしていないときにも、強化子を用意して強化する。それでも問題提起行動が出た時は、消去を図るということです。問題提起行動に関しては強化子は手に入らないようにする。

以上が私の ABCDEF 分析支援シートです。上手くいけば Good で、当事者は Happy になるのでGとHも加えれば、ABCDEF GH 支援ということになります。長ったらしいですね。

このダイナミック氷山モデルのパワーポイント、ABCDEF 分析の支援シートは私の HP から自由にダウンロードして、そして、また改良して、使ってもらって結構ですので、ぜひご利用ください。(https://kado2006.sakura.ne.jp/book1/book1.htm)

例えば		
行動	機能	FEABの候補
他の人からゲーム機を奪い取る	獲得	「貸してください」、「一緒にやろう」といった要求の仕方を教える
課題の材料を投げ散らかす	回避	「休憩」の要求、「課題完了」の報告、手助けの要求の仕方を教える
並んで待っている間に人をたたく	誘発	「待つこと」や「ないこと」の理解を教える



弱化について

弱化というのは、考えない方がいいと言いました。弱化で普段よく使われるのが、罰を与えたり叱ったりすることです。これには、副作用があるので、これだけを単独で使ってほしくないのです。罰を加えたり、厳しく叱ったりすることには、即効性があるのです。そうすると、罰したり叱ったりする行動が、強化されるのです。ビシッと叱ったら悪さをやめたとなるので、

次にまた悪さした時もまた叱るというように、叱る行動が強化されていきます。問題提起行動をすぐにやめてくれるからです。他方、本人の側はどうなるのでしょうか。罰に耐える修練を積んでいくことになるのです。そうすると、だんだん効果がなくなっていくので、罰や叱責はだんだんエスカレートしていきます。不幸なことに、いつの間にか虐待になってしまうことすらあります。そして、罰を与える者に対して憎しみを抱くようになるかもしれません。憎しみまでいかななくても、不快感や嫌悪感を抱くようになります。

さらに、人によっては、叱責とか罰が、注意や注目という強化子を獲得することになる場合もあります。そうすると、かえって問題提起行動は強化されてしまいます。

問題提起行動の予防

問題提起行動も、**予防に勝る対処法はありません**。そして、予防策は現在の問題提起行動への対処法ともなります。

予防には、先にお話しした PECS®の9つの(私に言わせれば10の)重要なコミュニケーション・スキルを教えることが重要だと思いますし、すでに問題提起行動が出ているとか、場合によっては強度行動障害になっている場合にも、同じ事をすればいいわけです。予防策と同じことを対処策として用いたらよいのです。

グラスバークが、問題提起行動を予防する方略トップ10ということを書書の中で書いています。その個所を訳したものを私のホームページで紹介していますので、お時間があればご覧ください。

問題提起行動を予防する方略 トップ10

(<https://kado2006.sakura.ne.jp/book1/book1.htm>)

その中で特に重要なのは、やはり**コミュニケーション・スキル**ですね。表出や理解のコミュニケーション・スキルを向上させるための工夫が必要です。特に発語が不自由な場合は、**PECS®**がベストです。

さいごに

今日は、問題提起行動の機能的に等価な代替行動としては、PECS®のことをお話ししましたが、十分にお伝えできたわけではありません。詳しくは、ボンディ&フロスト共著の『自閉症児と絵カードでコミュニケーション PECS®とAAC』(第2版、二瓶社)をお読みください。PECS®に関して日本語で読める本は、マニュアルを別にするとこの本だけです。

また、自閉症の人の問題提起行動と視覚的支援の仕方については、ホジダン著『自閉症スペクトラムと問題行動』(星和書店)もおすすめします。

自閉症児と絵カードでコミュニケーション
PECSとAAC 第2版
アンディ・ボンディ/ロリ・フロスト 著
山崎雅樹/竹内雄二/西沢一郎 訳

二瓶社
2,000円+税

古い版と間違えないように!

自閉症児と絵カードでコミュニケーション
PECSとAAC
A Picture's Worth

Solving Behavior Problems in Autism
Improving Communication with Visual Strategies

自閉症スペクトラムと問題行動
—視覚的支援による解決—

著者: リンダ・ホジダン
訳者: 山本 良一

アセスメント指針、具体的な視覚的支援法、豊富な事例を挙げ、コミュニケーション・スキルの向上と問題提起行動の解決について実践的に解説

リンダ・ホジダン著
門 真一郎・長倉いのり訳
『自閉症スペクトラムと問題行動』
星和書店
¥3,990